

大阪大学バンコクセンターから



海外交流

関 達 治*

Letter from Osaka University Bangkok Center

Key Words : Thailand, International relations, Foreign Students,
Cooperative Research, Bangkok Center

いまさら申し上げることもありませんが、タイは日本の約1.4倍、513,115平方キロメートルの面積を持ち、日本の半分越えの6,335万人(2004年末、タイ中央銀行調べ)の人口を有します。一方、海外の日本人は、2005年度には百万人を越え、タイの長期滞在者は、アメリカ、中華人民共和国、英国について世界で4番目となり、日本人のいる世界のビッグ4都市もニューヨーク、ロスアンゼルス、上海、バンコクとなっております(海外在留邦人数調査統計から)。さらに、タイの日本人滞在者実数は5万人を越えるとも言われています。このようにタイは日本にとっても良きパートナーであり、タイにとっても日本は輸出は総額の13%を占め、米国について第2番目の貿易相手国であります。タイは農業国というイメージがありますが、タイは米の輸出では世界一です。しかし、輸出主要品目を見ますと、コンピューター(部品を含む)、自動車(同)、ICがトップ3を占めており(JETRO資料より)、工業製品の輸出国でもあります。

また、ご存知のように、2001年に発足したタクシン政権は、安定した政権運営を行ってきましたが、2006年に入ると社会的対立が激化し、9月19日、軍による民主改革評議会が首都を制圧、統治権を掌

握するに至り、タクシン政権は終焉しました。同年10月、スラユット首相の下で暫定新内閣が発足し、2007年12月23日には下院総選挙が実施されました。その結果、国民の力党のサマック連立内閣が発足しています。新聞の報道では混乱しているように見えますが、街中はいたって平穏で、一般庶民は何事もないかのごとくバイタリティー一杯で働いています。このような中で出発した大阪大学バンコクセンターも二年目の半ばを過ぎようとしています。

タイと日本は、昨年に修好条約締結120周年を記念しましたように、歴史的な諸問題もあまり影響せず、良好な関係を保ってきています。特に2006年には、プミポン国王在位60周年の式典に天皇皇后陛下が2度目の訪タイをされるなど公式、非公式に皇室の往来もされています。先日、4月2日にはプミポン国王の孫、ワチラロンコン皇太子殿下の次女であるシリワンナワリー王女が、大阪大学工学研究科の知能・機能創生工学専攻を訪問し、石黒浩教授と浅田稔教授のご案内でロボットの見学をされ、本学においてもタイ日の新しい交流分野の始まりになると期待されます。



*Tatsuji SEKI

1943年8月生
大阪大学工学研究科醗酵工学専攻修士課程修了(1969年)
現在・大阪大学 国際交流室 大阪大学
バンコク教育研究センター長(特任教授)、
大阪大学名誉教授 工学博士 応用微生物学

TEL : +66-2-661-7584 (事務所)

FAX : +66-2-661-7585

E-mail : director-bkk@hpc.cmc.osaka-u.ac.jp



タイ科学技術週間(8月)において日タイ修好120周年日本館の開会式を訪問するマハー・チャクリ・シリントン王女殿下(タイ政府提供)



大阪大学知能・機能創生工学専攻でロボットを見学されるシリワンナワリー王女殿下。右隣の女兒はロボット。

さて、これもご存知のとおり、大阪大学は2007年10月1日に大阪外国語大学と統合しました。学生数は約4,550名増え、約16,400名となり、旧国立大学の中で学部生が最も多い大学となりました。また、学生総数は大学院生を含め約24,400名となりました。この数字をタイの大学と比較しますと、タイで良く知られているチュラロンコン大学の32,000名よりは少なく、マヒドン大学の23,200名よりやや多い数です。また、統合により本学への留学生数も約300名増え、図1に示しますように1,390名となりました。国別では中国(433名)韓国(278名)に続いてタイ(82名)、ベトナム(78名)と東南アジア

学生が続きます。東南アジア全体では中国に続いて約300人の留学生が来ています(2007年10月現在)。

統合により、本学との大学間学術協定交流を締結している大学若しくは研究所が、チェンマイ大学を含めて6大学1機関となりました。また、昨年の夏にはマヒドン大学前学長(当時は学長)のポンチャイ・マタンガソンバット教授に本学としては4人目の名誉教授を授与するなど、タイの大学との関係強化を図ってきました。学部間協定は、現在、さらに整備されていますがコンケン大学などが増える予定です。昨年には本学工学研究科とキングモンクット工科大学ラッカバン(KMITL)の工学部と部局間学術交流協定を締結しました。締結式は、本学から豊田政男工学研究科長、辻毅一郎理事(国際交流推進本部長)などが、KMITLからKitti Tirasesth学長、本学タイ同窓会長でもあるItthichai Arunrisangchai准教授らが出席し、10月5日にKMITLにて行われ、午後には電気工学に関するシンポジウムが開催され、交流を深めています。

さて、このような状況の中で、大阪大学が東南アジアをどのように捉え、どのような戦略で諸大学と交流を進めるのかが問題となります。勿論、欧米諸国との学生、研究者交流は大変重要で、本学の教育研究の水準向上に不可欠であります。一方では、

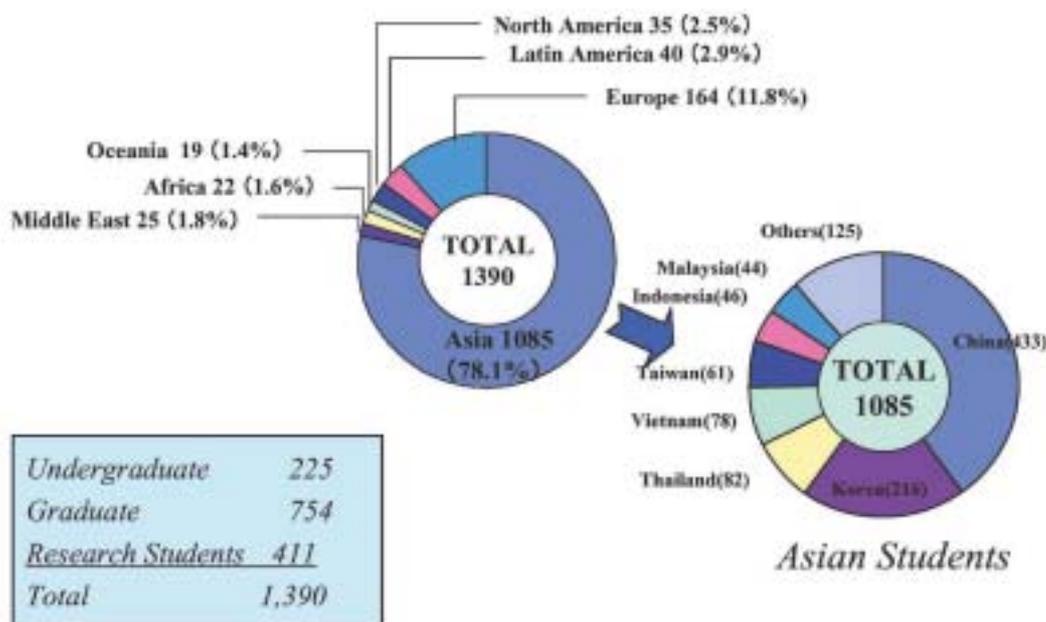


図1 大阪大学への外国人留学生の構成

我が国はアジア・アフリカとの関係強化が国策としていますが、留学生の殆どはアジアからであるのも事実です。そこでバンコク教育研究センターでは、学生交流を第1の活動とし、研究については、各部署が実施するオンサイト研究を支援することと考えています。



チェンマイでの日本留学フェアの開会式

学生交流では、優秀な留学生の受け入れを目指して、留学フェアに積極的に参加しています。今年は、バンコクセンター設置から2回目になりますが、一回目と同じく、タイ・日本人卒業生にボランティアで協力を頼み、より親しみやすい説明を心がけています。お蔭でより具体的な案内ができてきたと思っていますし、この留学フェアで卒業生が毎年逢えるような場になればと考えています。また、今年はコンケン大学で行われた日本大使館が独自に開催している留学説明会にも参加し大阪大学の紹介をしました。また、随時、センターでの留学相談にも応じています。将来的には面接など選考の一部がセンターでできればと思っています。



バンコクでの日本留学フェアでの大阪大学ブースで説明するバンコクセンター事務職員



バンコクでの日本留学フェアでの大阪大学ブースで浴衣姿で活躍するバンコクセンター事務職員



コンケン大学での日本留学説明会で大阪大学ブースを訪れる学生

さらに、今年からはFrontierLab@OsakaU という短期留学生受け入れプログラムが、理学部、工学部、基礎工学部が受け入れ部局として始まりました。これは学部の卒業研究のような機会、あるいは大学院における研究の一部を本学で行う機会を提供するもので、欧米からの学生誘致をより積極的に行い、本学の学生の国際性も高めようとしています。センターではこのような短期プログラムのそれぞれの大学へ出向いての案内と応募相談を行っています。従来からの文部科学省の奨学金制度による留学生政策は大変重要ではありますが、タイのように充実が図られてきた大学では、留学生を送り出すだけでなく、在校生の日本への派遣を通してタイの大学の発展を図る必要があります。それにはこのような短期留学受け入れが重要であり、本学とタイの大学の連携を更に強化できるものと考えています。

一方、本学学生の国際化を目指して、海外派遣を進めることが進められています。昨夏には、文系研究科が中心となり、マヒドン大学のインターナシヨ



マヒドン大学英語研修プログラムに参加しタイ料理の研修を受ける学生。マヒドン大学インターナショナルカレッジのホテル学科にて。



マヒドン大学英語研修プログラムに参加しタイ音楽の研修を受ける学生。マヒドン大学音楽学部にて。

ナルカレッジにおいて英語研修を試みました。従来は、工学研究科が中心となり、米国の数大学で夏季研修を行っていましたが、タイで実施した場合、コストが安いという利点があります。また、研修内容は英語能力向上が中心ですが、タイ文化の理解ということも取り入れています。タイの日系企業にも研修の一部を分担いただければ、具体的には現地社長などからの経験談などに関するお話が聞ければ、さらに研修の効果が上がると思われまますのでご協力をお願いする次第です。また、大学統合の結果、多くの語学系の学生がタイや周辺国に短期留学をしています。これらの学生への情報伝達や支援を重点的に行っていく予定です。

研究交流については、既に本誌でご紹介していま

すので詳細は省きますが、微生物病研究所がタイ保健省に研究センター(RCC-ERI)を設置して実施している新興・再興感染症に関する国際共同研究、生物工学国際交流センターがタイ5大学と実施している共同研究などの支援とともに、個々の研究者のタイにおける共同研究の支援も行っています。



第2回大阪大学市民講座「感染症から身を守る」で挨拶する国際交流担当・辻毅一郎理事。

最後に、はじめにも書きましたように多くの日本人がタイに滞在しています。この方々への本学の貢献として、RCC-ERIの協力により感染症などに関する公開講演会(市民講座)を毎年開催しています。実施に当たっては、在タイ大使館との連携を図り、日本人会、バンコク病院の協力を得ています。また、大学統合により、本学ではグローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)を設置し、JICAとの包括協定など利用した海外協力を推進しようとしています。そのために特任助教がセンターで勤務するようになりました。

バンコクセンター(www.osaka-u-bangkok.org/)では色々なことを始めていますが、サンフランシスコやグローニンゲン(オランダ)のセンターとも同じく、活動内容が定められたものだけではありません。バンコクセンターでは試行錯誤的に各種の行事を行いつつセンターの機能を作り上げて行きたいと考えますので、よろしくご鞭撻をお願いしまして筆をおかせていただきます。